



松村智雄『インドネシア国家と西カリマンタン華人——「辺境」からのナショナリズム形成』慶應義塾大学出版会，2017，xi+320p.

本書は、インドネシアのなかでも西カリマンタンの人々、とりわけ中国系住民（華人）がインドネシア国家とどのような関わりを持ってきたのか、1950年代から今世紀初頭までの歴史を辿ることで追究しようとするものである。

各章の概要

本書の構成は次の通りである。

序章

- 第I章 インドネシア国家との弱いつながり
- 第II章 西カリマンタンの軍事化と華人
- 第III章 スハルト体制期の華人同化政策と西カリマンタン華人
- 第IV章 「改革の時代」の西カリマンタン華人終章

このうち、課題と視角・方法を述べる序章は問題を多く孕むので、後で詳しく検討する。

第I章は主に1950年代を扱う。著者によれば、この時期、西カリマンタンの華人は成立間もないインドネシア国家の「外部」で生活していた。少なくとも同国家の影響は限定的であった。西カリマンタンがインドネシア共和国の一州として正式に成立するのは1957年だが、その後も「以前からの自生的社会秩序が機能し続けた」(p.293。全篇の随所に同様の表現)。華人の自己認識についてみると、19世紀以前からの潮州人や客家人としての意識に加え、20世紀に芽生えた「中国人」という自己認識が、新中国の成立により高まった。かかる意識は、学校教育・新聞などで用いられる言語が中国語だったことや、当地の華人にとってジャカルタよりシンガポールの方が経済的・心理的により近く、また大学教育を受けるため中国に赴く人々が多かったことなどに支えられていた。自らがそこに属するとは「夢にも思っていなかった」

インドネシア国家の影が忍び寄るのは、1950年代後半に浮上する国籍帰属問題と、独立後のインドネシアで高まる「経済のインドネシア化」を端緒とするが、その影響力も西カリマンタンでは限定的であったという。

第II章は、西カリマンタン華人に大きな衝撃を与えた「1967年華人追放事件」の原因や経過、帰結を分析する。1960年代の同地では、英領サラワクから入り込んでいた共産主義ゲリラとインドネシア共産党のメンバーが「反マレーシア運動」を展開していた。いずれも中国系の構成員が多かったという。マレーシアとの対決政策をとっていたスカルノ政権のもとで両者の動きは活発化したが、1965年の9.30事件によって状況は一変した。これを機に権力を握ったスハルト統制下の国軍は、1967年に入り西カリマンタンでも共産主義者の肅清を本格化した。その際、現地に不慣れな国軍は、内陸部に住むダヤク人を扇動して華人と対立させた。結果、内陸部の華人はダヤク人に迫害され、沿岸の都市部に追放され難民化した。著者によれば、この事件の重要性は、「西カリマンタン華人の目前にインドネシアの国家権力が初めて明確な（不幸な）形で現れた出来事」(p.96)だった。

第III章は、1966～98年のスハルト体制期、西カリマンタン華人の間でもインドネシア国家の存在感が上昇した様子を幾つかの側面から描く。一方ではこの時期、インドネシア語による教育、インドネシア国籍付与など、国家主導で推進されるナショナリズムの諸政策が西カリマンタンの華人にも及んだ。スハルト政権が採ったいわゆる同化政策から同地の華人も無縁ではいられなかった。だがその中で、「彼らは地元社会の事情も踏まえながら、国家の推し進めるナショナリズムの普及に対して、適当な落としどころを模索した」(p.166)。具体的事例として、多くの華人組織が同化を名目に解散を命じられる中で生き延びた西加孔教華社総会(YBS)の活動実態、1987年のサンバスマ県議会選挙、華人の伝統宗教実践を守ろうとした黄威廉の運動、1980年代以降顕著になった西カリマンタン華人のジャカルタへの移動現象と首都での商業的成功のさまなどが検討される。

第IV章はスハルト政権の倒れた1998年以降、

2010年代初頭までをカバーする。著者の捉えた変化の一つは、スハルト期に課せられた華人への政治・社会的な諸制限が撤廃されたことにより、華人の政治参加が加速したことである。その際、ジャカルタに移住した華人の組織化が急速に進み、西カリマンタンの政治のあり方に影響を及ぼすようになったことが指摘される。その一例として、華人の年中行事である元宵節の儀礼における主導権争いの内実が分析される。他方、華人の政治的台頭に対し、ダヤク人やムラユ人の警戒による動きが高まり、民族的対立の危機に至った。この事態に直面し、華人初のシンカワン市長ハサン・カルマンが提唱した「ティダユ」(ティオンホア=中華、ダヤク、ムラユの合成語)概念と市政における実践の意義が、インドネシアの国家スローガン「多様性の中の統一」との関係において強調される。最後に、インドネシアにおける西カリマンタンの表象のされ方の事例として、著者は2000年代に発表された3本の映画作品を比較検討する。

批評

本書の方法論的な柱でもあり、全体の記述を生き生きとしたものにさせている要因は、何といっても旺盛なインタビュー調査であろう。広大な西カリマンタンの沿岸都市部から奥地までを飛び回り、首都ジャカルタでは幾つかのスポットに腰を据え、これと聞きつけた人物へしらみつぶしにアタックし、面談を重ねた様子がよく伝わってくる。聞き取りの内容は、「1967年華人追放事件」前後の凄惨なできごとや、相互に対立する存命中の政治家たちの本音など、相当センシティブな事柄を含む。おそらくインタビューの技巧などは二の次で、インフォーマントの多くは、一途に真実を求める著者の熱意にほだされ、胸襟を開いたものと推察される。

個々の事柄につき一人のインタビュー結果にそのまま依存しすぎ、「裏をとる」努力が足りない傾向は全体として認められる。だがそもそも西カリマンタン史には「文献資料が極端に不足している」(p.43)と判断したがゆえに採られた方法であり、複数の情報源から照合するの口でいうほど簡単ではない。僅かな手がかりをつなぎ合わせて、各

章・節ごとに、また章や節をまたいで一続きのストーリーに編み上げた努力は賞賛に値する。

この手法が最も成功裡に生かされているのは、第II章5節の難民の状況の再構成と、第III章6節のタナアバン調査であろう。特に後者は、「経済力」が強調される割にほとんど草の根の実態研究がなされていない東南アジア華人の社会経済史(の断片)として秀逸である。

反面、改善されるべき点も多い。先に予告した通り、特に序章は問題含みである。何より先行研究の評価に大きな歪みがある。とりわけ、およそ国民統合に関わる議論をおしなべて「同化パラダイム」だと決めつけている点は看過できない。例えば、西カリマンタン華人史の先駆であるソマーズの[Somers 2003]が「(同地においても)インドネシアへの帰属意識が増してきている」と述べていることだけをもって、「華人同化論に依拠」したものだ一蹴している(p.25)。ソマーズに限らずスルヤディナタもコペルも、また彼らの驥尾に付してきた評者も、さらにはその研究対象=主役たるインドネシアの華人自身も、いかに同化主義に陥ることなく華人の国民統合を立論し得るかという点に腐心してきたのが20世紀以来の大勢であったことを思えば、我田引水のあまりの暴論といわざるをえない。

著者は「国民国家との関係によって書かれていた華僑華人の歴史記述に再考を促すことを企図」(p.9)したともいうが、少なくとも本書は、冒頭の中国ナショナリズムの興隆に始まり、中盤から後半にかけては結局、西カリマンタンとその地の華人がジャカルタを中心とするインドネシア国家にいかに関わり込まれていったか、という国民国家統合論に収斂している。著者がことさら対照先にしようとするジャワの状況と、10年程度のタイムラグはあるにせよ、起きたことに本質的な違いがあるようには感ぜられない。本書が著者の企図に反しナショナリズム論の枠を出ていないことは、そもそも「『辺境』からのナショナリズム形成」という副題にも表れている。なお、この「形成」の主語が誰(何)なのか、最後まで明らかでない。

本書の特長としてしばしば強調される「辺境」

論も上記のことがらと密接に関わる。仮に西カリマンタン華人という対象が地理的・人的な「二重の辺境」だという著者の主張をそのまま認めたとしても、辺境を取り上げるだけで「国家史・国民史を脱構築」(p.7) できるとは限るまい。第I章の紹介で触れた「以前からの自生的社会秩序」は「辺境特有の秩序」とも表現を変えながら繰り返し用いられるが、それが具体的にどのような内容であったのか、明らかにした箇所はない(pp.37~38)で蘭芳公司や和順公司への僅かな言及があるが、それらを指すのか?。「脱構築」の一つの手段は、著者が主張する「辺境の自生的社会秩序」の具体像を何らかの方法で究明することではなかろうか。

著者の狙いを表す、いま一つのキーワードは「生活実態」である。序論でも「(ナショナルな帰属論などから)漏れ落ちる華人の実態があるのではないか」(p.26)と著者の問いが示される。が、先に賞賛した2箇所ほどの部分を除けば、西カリマンタン華人の生活実態が伝わってくる記述はほとんど見当たらない。その代わりに、3本目の映画を論評した部分(p.281)で、『華人とナショナリズム』という主題は……シンカワン華人の日常生活に登場しない要素であり、彼らの生活感覚はそのようなところにはない」という。それ自体は当然のことだろう。何も西カリマンタンに限らず、ジャワを含むインドネシアの他地域であれ、世界のどここの国であれ、大多数の人々にとって日常の「生活感覚」は、本来ナショナリズムなどの思想とは別次元にある。

「人々の生活実態」を明らかにしようと企てて出版した本書が結局ほぼ国民統合論の枠に納まってしまったのは、方法上の問題でもあろうが、それだけではあるまい。「辺境」の西カリマンタン華人でさえ否応なく国民国家やナショナリズムに巻き込まれたのは、つまるところ、20世紀がそういう時代だったからではないか。だからこそ、これまでの研究者はまずもって国民国家と華人の関係を考えたのである。

そのことを踏まえ、なお人々の「生活実態」に迫ろうとするなら、ナショナリズムの作用をみることで自体を「同化パラダイム」として排除するのではなく、それをも織り込んだ別のアプローチが

必要になるだろう。インドネシア華人を扱ったものに限っても、日本語では津田浩司の仕事〔特に2011〕が有力な示唆を提供している。またレヴの伝記的研究〔Lev 2011〕は、たった一人の生涯に徹底的に寄り添うことを通じて、各地の華人社会の「生活実態」や、それを取り巻くインドネシアと世界の動向、ナショナリズムを含む政治や文化のありようをも、同時に浮き彫りにすることが可能だと教えてくれる。

本書は全体として拙速に出版された印象を否めない。政府というべき所にまで国家という言葉が濫用している点をはじめ、日本語の用法に疑問が残る箇所が多すぎる。校正も甘い。何より索引がないのは困る。書き手にとって自明の固有名詞などが、大半の読者にとっては初めて目にするものである(初出箇所を覚えているわけではないので、2回目以降、その人が誰だったかわからない)ことがままある。評者は本書をきちんと理解するために、主要な人物・組織・事項のインデックスを自作しながら読み進めることを余儀なくされた。読者にわかりやすく読んでもらうための労力を惜しんではなるまい(自戒をこめて)。

総じて本書は、よくもあしくも若さ溢れる勢いのある作品といえる。著者にとってもわが国の華人研究にとっても鮮烈な「青春の記念碑」となることであろう。

(貞好康志・神戸大学大学院国際文化学研究所)

言及文献

- Lev, Daniel S. 2011. *No Concessions: The Life of Yap Thiam Hien, Indonesian Human Rights Lawyer*. Seattle and London: University of Washington Press.
- Somers Heidhues, Mary. 2003. *Goldiggers, Farmers, and Traders in the "Chinese Districts" of West Kalimantan, Indonesia*. Ithaca: Cornell University.
- 津田浩司. 2011. 『華人性』の民族誌——体制転換期インドネシアの地方都市のフィールドから』京都:世界思想社.